VOL.8（令和２年３月）
発行：道路局橋梁課

はしのはなし

第八稿
新浦島橋ものがたり

「はしのはなし」では、皆さんに横浜の橋の歴史や小話を、定期的に紹介していきます。第８回目は、新浦島橋について。

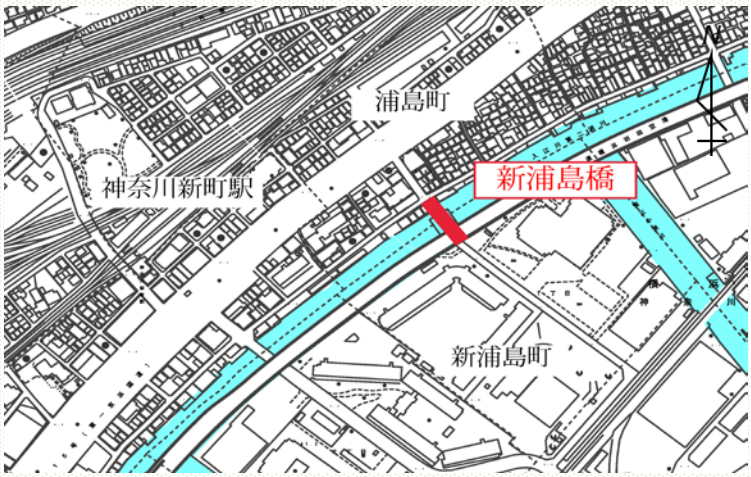
新浦島橋は神奈川区の入江川第二派川に架かる橋で、横浜の海岸部の埋め立ての歴史に関係し、橋の名称は浦島太郎伝説にも関わります。そんな新浦島橋の誕生から現在までをはなしていきましょう。

1　新浦島橋はどこにあるのか？

新浦島橋は右図のとおり、神奈川区の浦島町と新浦島町を結ぶ、入江川第二派川に架かる橋です。

新浦島橋は、海岸部の埋め立てに伴い、明治41年(1908)頃に、架けられたと考えられています。

その後、架設から100年以上が経過し、老朽化への対応と地震対策の実施のため、平成25年(2013)から架替工事が行われ、平成30年(2018)１月に新しい新浦島橋が開通しました。



新浦島橋の位置図

a

架替前の新浦島橋を北東側から望む。レンガ造りの橋脚の老朽化のため、桁はH鋼で補助的に支えている（平成24年(2012)撮影）

b

架替後の新浦島橋を北東側から望む。架替前は川の中に４つの橋脚があったが、架替後は１つになった（令和元年(2019)撮影）

【架替前の新浦島橋の諸元】
- 橋長：54.2m
- 幅員：4.6m
- 竣工：明治41年(1908) ※推定
- 橋種：５径間単純桁橋

【架替後の新浦島橋の諸元】
- 橋長：49.0m
- 幅員：13.0m
- 竣工：平成30年(2018)１月
- 橋種：２径間連続鋼床版鈑桁橋

図版出典　a,b：橋梁課撮影

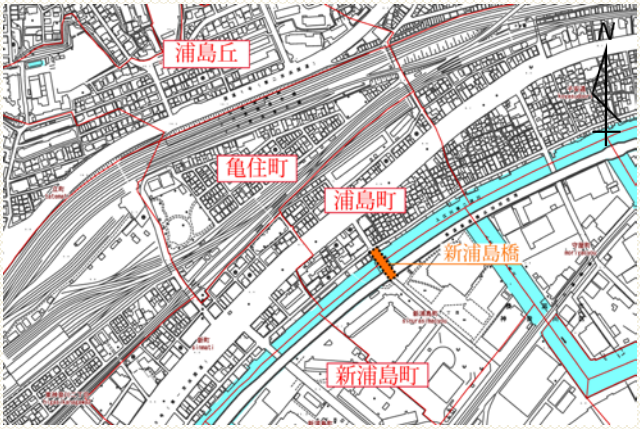
2　新浦島橋の「浦島」の由来は？

新浦島橋の「浦島」は、新浦島橋が架かる場所の地名が由来と推察されます。橋の周辺には浦島町や新浦島町以外にも、浦島丘や亀住町など、おとぎ話の「浦島太郎」を連想させる地名があります。

浦島太郎はもともと丹後国（現在の京都府北部の丹後半島一帯）に発生し、六世紀頃には成立していたといわれる物語ですが、その後日本各地に物語が伝承され、各地に様々なバリエーションの浦島太郎伝説ができました[1)]。神奈川区の浦島太郎もその一つです。

神奈川区の浦島太郎は、少なくとも戦国時代には物語が完成していたといわれ、現在の浦島丘付近にあったとされる観福寺は、江戸時代には浦島寺と呼ばれ、多くの信仰を集めて東海道沿いの名所の一つであったと言われています[1)]。

観福寺は、明治時代初期に火災で焼失しましたが、消失を免れた浦島観音像や浦島寺の碑は、神奈川本町の慶運寺に移転されました。



新浦島橋周辺の地名

c

浦島太郎伝説を後世に伝える浦島太郎山車（浦島町内会蔵）

d

慶運寺門前の、亀の台座の上に
建つ浦島寺碑

e

慶運寺観音堂の外観

f

慶運寺観音堂内の亀乗浦島聖観世音立像(左)、
浦島太郎像(中央）、乙姫像(右)

註　1）横浜市歴史博物館,「開館10周年記念特別展 よこはまの浦島太郎」,株式会社精興社,2005,P7-10

図版出典　c,f：横浜市歴史博物館,「開館10周年記念特別展 よこはまの浦島太郎」,株式会社精興社,2005,P18-21,P115
d,e：橋梁課撮影（浄土宗慶運寺内）

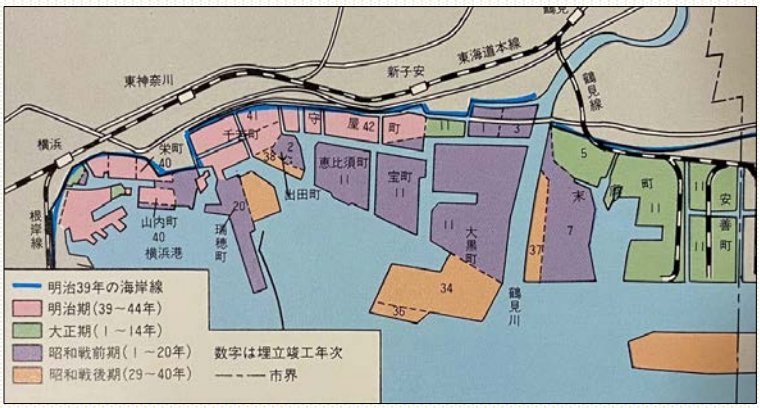
3　海岸線の埋め立てと新浦島橋の誕生

新浦島橋の誕生は、今から100年以上前に遡ると考えられます。

明治36年(1903)に、横浜の政財界で活躍していた数名が共同して付近の埋め立てを出願し、認可を受けました。この権利は明治39年(1906)に横浜倉庫株式会社に譲渡され、翌年から埋立工事が着手されました[2)]。陸地と造成された埋立地を結ぶために、明治41年(1908)頃に現在の新浦島橋の位置に橋が架けられたと考えられます。

その後、新浦島橋は長い間民間企業の専用橋として使用されていましたが、新浦島町の再整備に伴い、昭和62年(1987)に横浜市に移管されました。

g



京浜工業地帯の埋め立ての過程

h

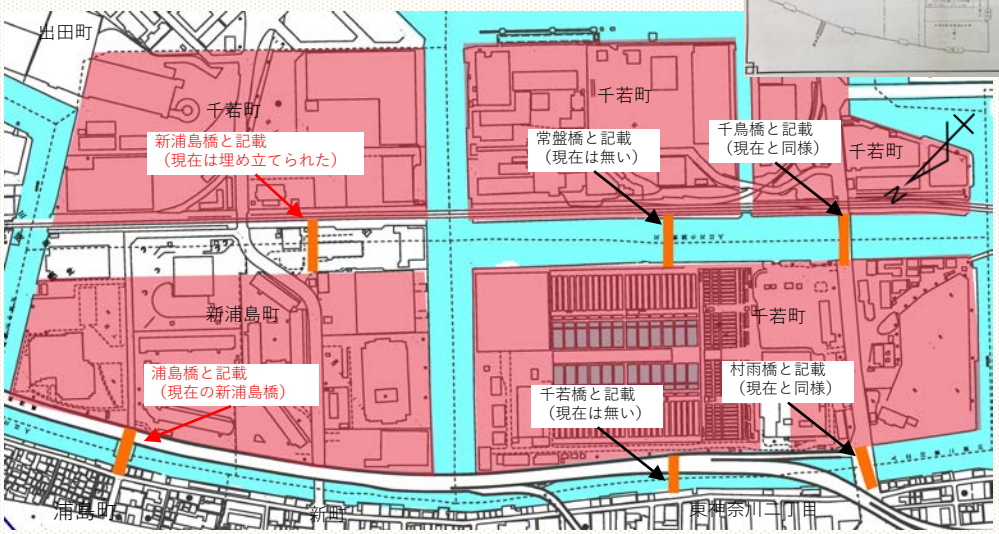
「大日本人造肥料株式會社横濱工場」と書かれた絵葉書。写っている橋が新浦島橋と考えられる（撮影時期は不明）

【コラム】「新浦島橋」はもともと「浦島橋」だった？

新浦島橋の誕生当初に橋を所有していた横浜倉庫株式会社が作成したと考えられる「横浜倉庫株式會社構内全圖」(右図)では、現在の「新浦島橋」の位置にある橋が「浦島橋」と表記されています。一方で、現在は運河の埋め立てで無くなってしまった橋が「新浦島橋」と表記されています。

i

「横浜倉庫株式會社構内全圖」と書かれた図面



「横浜倉庫株式會社構内全圖」の内容の一部を現在の地図に重ねた図。赤色の箇所が明治39～44年に埋め立てられた箇所、オレンジ色が当時の橋の位置。現在の新浦島橋は図左下の位置にある（図の位置関係は参考です）

その後、橋の所有者は何度か変わりますが、今回確認できた他の図面では、新浦島橋の位置は、現在と同様です。

新浦島橋はもともと浦島橋という名称だったのか、今回の調査でははっきりとしませんでしたが、興味深いところです。

註　2）神奈川区誌編さん刊行実行委員会,「区政施行五〇周年記念 神奈川区誌」大日本印刷株式会社,1977,P314

図版出典　g：横浜市市民局情報センター、「市政100周年・開港120周年 図説 横浜の歴史」,2006,P303
h：横浜開港資料館,「100年前の横浜・神奈川 絵葉書でみる風景」,株式会社有隣堂,1999,P123
i：神奈川県立公文書館蔵,「昭和16年度参事會議案原稿」,1941

4　レンガ造りの橋脚の保存

架替前の新浦島橋は、特徴的なレンガ造りの橋脚で支えられ、地域から愛されていました。しかし、経年劣化が激しく、地震対策も必要とされていたことから、平成25年(2013)に開始した架替工事で、やむを得ず撤去しました。

レンガ造りの橋脚の一部は保存し、現在は新浦島橋のたもとで展示しています。また、新しい新浦島橋の桁の色はレンガをイメージした色とし、橋の四隅の親柱には、レンガ積みのデザインを採用するなどして、昔のレンガ造りの橋脚のイメージを残すように工夫しています。

j

橋の下から見た、架替前のレンガ造りの橋脚
（平成24年(2012)撮影）

k

保存されたレンガ造りの橋脚の一部を、新しい橋のたもとで見ることができる（令和元年(2019)撮影）

l

レンガから張り出した窪みのある石は、かつて木製の方杖（ほうづえ）をうけて、橋の桁を支えていたと考えられる
（写真の方杖はイメージです）

m

新しい新浦島橋の桁の色は、レンガ造りの橋脚をイメージした色とした（平成30年(2018)撮影）

n

橋の四隅の親柱には、レンガ造りの橋脚のデザインを採用した（平成30年(2018)撮影）

図版出典　j,k,l,m,n：橋梁課所蔵